手拭の歴史的消長

奥平　志づ江
岡田　美恵子

1. はじめに

文化の進展，時代とともに言葉とその意味は変わるものであるが，「手拭」（てぬぐい）は江戸時代から今日まで，木綿の平織でできた日本手拭を意味した。然し最近，手拭は日常家庭から殆んど姿を消して，代りに西洋手拭即ちタオルが手ぬぐい・汗拭い・浴具として手拭本来の機能を果しており，「日本手拭」とことわらなければ「西洋手拭」と間違える程に語意が変わりつつあると思われる。「風呂敷」のように生地の種類が多く，形状，用途が限られているものは，その名や意味も当分変わらないと考えられるが，「傘」のように本来の機能を洋傘に独占されたものでは，「和がさ」・「からかさ」等と指名しなければ現在は「こうもりがさ」以外のものを意味しない程である。手拭地のよさは，食器類を拭く布巾に今も生かされてはいるが，手拭本来の機能においてタオルが優れているため，家庭では余り使われなくなったものである。

このように手拭の名と用途のかかわり合いに関心を持つたのが動機となって，その歴史を調べて行くうちに，伝統的な風習・芸術と結びついた副次的の用途に手拭が驚くほど多く用いられ，手拭独得の持味を生かしていることが判った。特に急速に普及した，江戸時代の庶民が工夫した被り物としての手拭の用途には興味深いものがある。

2. 手拭の起源

原始時代には濡れた手は自然に振りながら乾かしたり，手近な自然物例えば草木類，砂等にこすりつけるか，身につけている布類で拭いて乾かしたことは容易に想像される。身につけた衣服とは別の「きれ」を使って濡れた手や体を拭くようになったのは，それほど遠い昔ではなかったと考えられる。手拭の起源は定かではないが当然始めに使われた時と所は文化の進度の相違にしたがって様々であり，歴史の古い中国では西歴紀元より遙か以前に今日でいう手拭の類が使われていたことは充分考えられる。我が国では光明皇后（奈良朝初期）が浴室で手巾の類を使ったということが伝えられているが，諸種の文献等から類推すると奈良時代以前から使われ

ていたことが判る。「手拭」の語源で文献に現われた古いものは平安時代「日本霊位記」に記された「大乃己比(たのこひ)」で，鎌倉時代では「手巾(たなこひ)」又は「手拭(たなこひ)となり，江戸時代に今日と同じ発音の「手巾(てぬぐひ)」即ち「手拭(てぬぐい)」となったようである。

3. 手拭地の長さと用途

綿花は8世紀，桓武天皇の時代にインド人の漂流者によって日本に持込まれたと言われるが，その頃まで手拭地としては，「カラムシ」のさらした布，麻布，葛布，絹布などが用いられ，手拭の使用は宮中，貴族，武家などに限られていたようである。室町後期に朝鮮より綿布が大量に輸入されてから，木綿は手拭地の大部分を占めるようになり，江戸期には綿の衣服と共に手拭も一般庶民の間に普及し，その用途も急速に広まった。江戸期に開発された手拭の用途は実に画期的で，手ふき，汗拭い，浴具としての本来の使い方とは別の，芸術的，装飾的及び識別の具(身分・職業など)としての用途の拡大には目をみはるものがある。その大部分は今も日本料理の板前，その他の職人やお祭りの氏子等の鉢巻として，また日本舞踊，高座等の小道具，和服の服飾品としてよく見られるところである。このうちかぶりものとしての手拭の使い方については別に詳述する。

手拭地の長さは古くは一定せず，短いので鯨尺の3尺(約114 *cm*)長いので2丈1尺(約8 *m*)と種々雑多で，用途にしたがって手拭地を適宜に切って用いたわけで，本来の汗拭い，浴具としての手拭地が腹巻，褌，帯としての長尺に多用化されたのである。西鶴の「好色一代男」に主人が手代の利平に手拭を餞別に贈っていることが書かれているが，年賀，暑中見舞，宣伝用，襲名披露等に屋号や紋を染め出したものを得意先に配る風習は現在も残っている。

このほか，手拭は携帯にも嵩ばらず，木綿平織の柔らかい生地を生して救急時の包帯代りにも使用できる利点がある。

4. 手拭のかぶり方

かぶり方には種々あるが大きく分けて鉢巻，頬かぶり，置手拭がある。

(1) 鉢　巻

鉢巻には手拭を絞ったり，捩じったりして頭に巻く「向こう鉢巻」(図1)，「よこ鉢巻」(図2)，「やじ鉢巻」(図3)，「おんな鉢巻」(図4)，「うしろ鉢巻」(図5)などがあり，そば屋，魚屋，うなぎ屋，石屋，大工，鳶職，瓦屋等の職人達の間で用いられ，気持ちを引きしめ，威勢を示すのに役立つようである。

「江戸の魚屋」（図６）にその様子がうかがわれる。

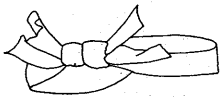

図１－向こう鉢巻

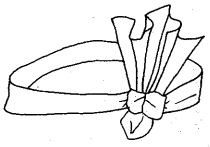

図２－よこ鉢巻

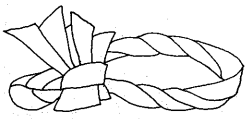

図３－やじ鉢巻

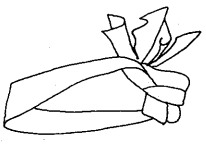

図４－おんな鉢巻

図５－うしろ鉢巻

図６－江戸の魚屋

⑵　頬かぶり

頬かぶりは手拭を頭から両頬へかけて顎下で結ぶもので，農夫に多く用いられ，別名「百姓かぶり」（図７）ともいわれる。一般に言われる「頬かぶり」（図８）は頬で手拭の両端を捩じって挟むかぶり方である。顎の下で結ぶのを「すっとこかぶり」ともいい，同じようなかぶり方で「女かぶり」（図９）がある。又これと似通った頬かぶりに頬で結ぶ「道行」（図１０）があり，さらに鼻の下で結んだ「鉄火かぶり」（図１１）もある。「鉄火かぶり」は遊び人，盗人などが用いる下品な頬かぶりと言われる。「頬かぶり」が「ぬけぬけと素知らぬ振りをする」の意に用いられるのはこれからきたものと思う。「吹き流し」（図１２）又は「吹きかけ手拭」といって頭の上にひらりと手拭を置き，その上から塗り笠などをかぶるのも頬かぶりの類である。「八百屋の物売り」（図１３），「正月の荒神松売り」（図１４）にも頬かぶりの姿が見られる。

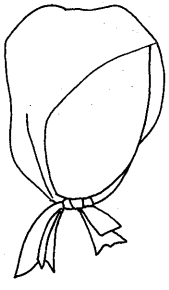

図７－百姓又は
すっとこかぶり

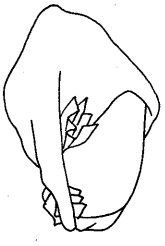

図８－頬かぶり

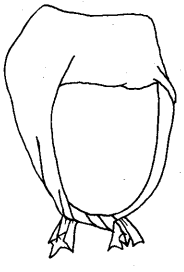

図９－女かぶり

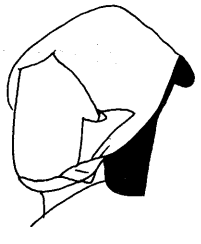

図１０－道　行

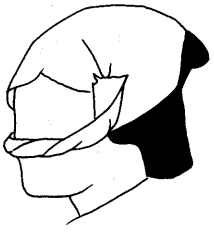

図１１－鉄火かぶり

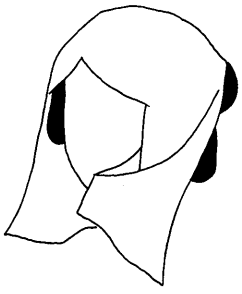

図１２－吹き流し

図１３－八百屋の物売り

図１４－荒神松売り

⑶　置手拭

手拭を二つ折りにして額におき，後の両端を髷の後で結んで止める所謂「置手拭」は，「吉原かぶり」（図１５）又は「大尽かぶり」ともいい，昔の大尽の遊里通いの風俗から名付けたものと思われる。これとは逆に二つ折りにした手拭を頭にのせ前の両端を鼻にかけて結ぶ防暑用のかぶり方が天保の頃流行したとあるが，これも置手拭の類である。「米屋かぶり」（図１６）というのは，糠ぼこりの中で働く米屋が埃よけに考えたもので，一方の端から頭に巻きつけて上の方をよせて，巻き終りの端を挟むようにして止めるかぶり方で，江戸では浅く京阪では目のかくれる程深く巻きつけたと言われる。「けんかかぶり」（図１７）も同じような巻き方であるが，巻き始めと巻き終りの両端を髷尻にかけて結んでとめたものである。「姉さんかぶり」（図１８）は現在でも時々見かける置手拭の類である。

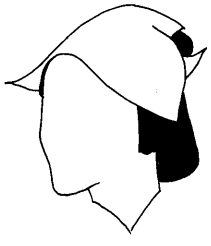

図１５－吉原かぶり

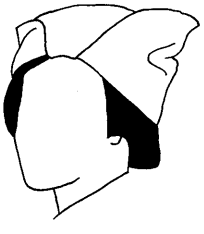

図１６－米屋かぶり

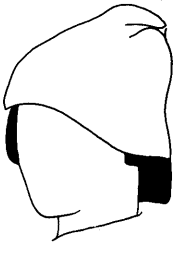

図１７－けんかかぶり

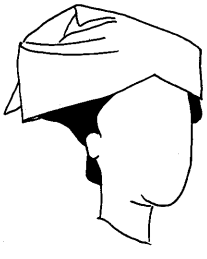

図１８－姉さんかぶり

5.　手拭の染めと柄

手拭が使われ始めた頃は，長い間白生地が用いられたが，平安朝の末期になると染地，柄物も使われるようになり，江戸時代には浅黄（あさぎ）梅染（べっこう色）等の鮮やかな染色模様がその粋を競った。

当時から伝わる赤手拭はおもに京阪で，水浅黄（淡青）で染めた無地の「かめのぞき」は江戸で，祭礼などに使われたものである。

江戸時代の染手拭には渋手拭（柿手拭），染わけ手拭などがあり，型染め・豆絞り・手綱絞り・だんだら横段・芥子玉（しらみ絞り）等染上りのきわめて精巧なものもできて，中期にはその染め方を競う「手拭合せ」といわれる趣味の会合が盛んに催されたといわれている。

装飾品としての飾手拭は緞子（どんす）や縮緬を白や赤，水浅黄，花色，紺などに染めたもので，日本舞踊の小道具に使われる。これらの踊り手拭のけいこ用のものには，晒木綿に流儀や縁のある紋を染めたものが，舞台用のものには縮緬にその役柄と関係のある模様や役者の紋を染めたものが多い。江戸時代の手拭染色に最も多く使われた藍草（あいだて）と紅花の草木染め染料は現在も使われている。

6. まとめ

手拭の歴史を見ると，その生地は衣服の繊維とともに移り変わりながら，手拭い・汗ふきとしての本来の機能に最も適した並巾，90cmの長さの木綿に落ちついたもので，用途はその染色技術の進歩にともなって，和服の服飾品・芝居・踊り・高座の小道具等と多用化されてきたことが判る。

西洋タオルの輸入とともに，タオルは実用的な機能において日本手拭に優ることが一般に認識され，特に戦後急激な生活様式の洋風化に拍車をかけられたかのように，本来の手拭の用途ではタオルに完全にその座を奪われた感がある。しかし，副次的な用途，例えば和服，日本料理，日本舞踊その他日本古来の伝統芸術，風習と結びついた使いみちは，タオルでは到底その粋を表現するわけにはいかないので，たとえ日常家庭からはその姿を消しても，これらの芸術，風習が続くかぎり，手拭独特の用途は今後も永く残るものと思う。

参考文献

(1) 金沢康隆著　江戸服飾史　　青蛙房刊

(2) 田中千代著　田中千代服飾事典　　同文書院

(3) 宮本馨太郎著　かぶりもの・きもの・はきもの　　岩崎美術社

(4) 川上桂司著　衣生活1974号11月号　　衣生活研究会

(5) 額田　巌著　ものと人間の文化史　結び　　法政大学出版局

(6) 石田一良著　日本文化史概論

(7)　喜多川守貞著　近世風俗史　　魚住書房
(8)　三谷一馬著　江戸商売図絵　　三樹書房
(9)　　〃　　江戸庶民風俗図絵　　三樹書房
(10)　被服文化協会編　服装大百科事典（上）　　文化服装学院出版局